

HOT! FUN! IWAKI!

MIRAIの 医療ZINE(人)

看護師を率いる者としての心構え

——看護部長として700人の看護師を率いている中で、特に意識していることは何ですか？

長谷川：現場の看護師たちとフラットな関係を築くことを大切にしています。頻繁に病棟に顔を出して、「困ったことはない？」と声をかけることで、現場の気持ちに寄り添う姿勢を見せるようにしています。

また、自分が幸せであることが患者さんへのケアに繋がると考えています。例えば、空腹のまま仕事をしてしまうと、患者さんに優しく接することが難しくなるかもしれません。自分自身が満たされてこそ、患者さんを幸せにできるという考えは、常にスタッフにも伝えていきます。

——長谷川さんの長いキャリアのお話から、看護師のやりがいや求められる役割を知ることができ、看護師という生き方がとても魅力的に思えました。それだけでなく、チームとして先輩や後輩のつながり方、さらにはトップである長谷川さんをはじめ、上の方々の目配りや気配りがステキだなと感じました。安心して成長でき、チームで仕事ができ、そして何より、人にしかできないやりがいのある仕事。「看護師」という生き方、アリじゃないですか。

＼ここでは紹介しきれないので、ぜひサイトをのぞいてみてください！／

WEB サイト **<https://iwakinoiryo.com>**



編集後記

今回は「看護師」を特集しました。医師、薬剤師、栄養士やリハビリスタッフなど多様な職種が力を合わせる「チーム医療」、その要となるのが看護師なのかもしれません。患者さんに最も身近に接し、患者さんの状態に関する情報をチーム内で共有し、チーム内のコミュニケーションと連携を促進する。特集の中でも、長谷川看護部長は「看護師に求められる大きな役割の一つが“調整力”」と仰られています。そんな医療の要の看護師ですが、不足が深刻化しています。私たちMIRAIの医療ZINEでは医師だけでなく、これから看護師をはじめとするメディカルについての取材や発信も展開していきます。

取材協力

いわき市医療センター、いわき市医療センター看護専門学校



看護学生がナイチンゲールの像から看護の灯を戴く看護宣誓式。看護師を志す者として看護への責任と誇りを自覚し、成長を誓います。

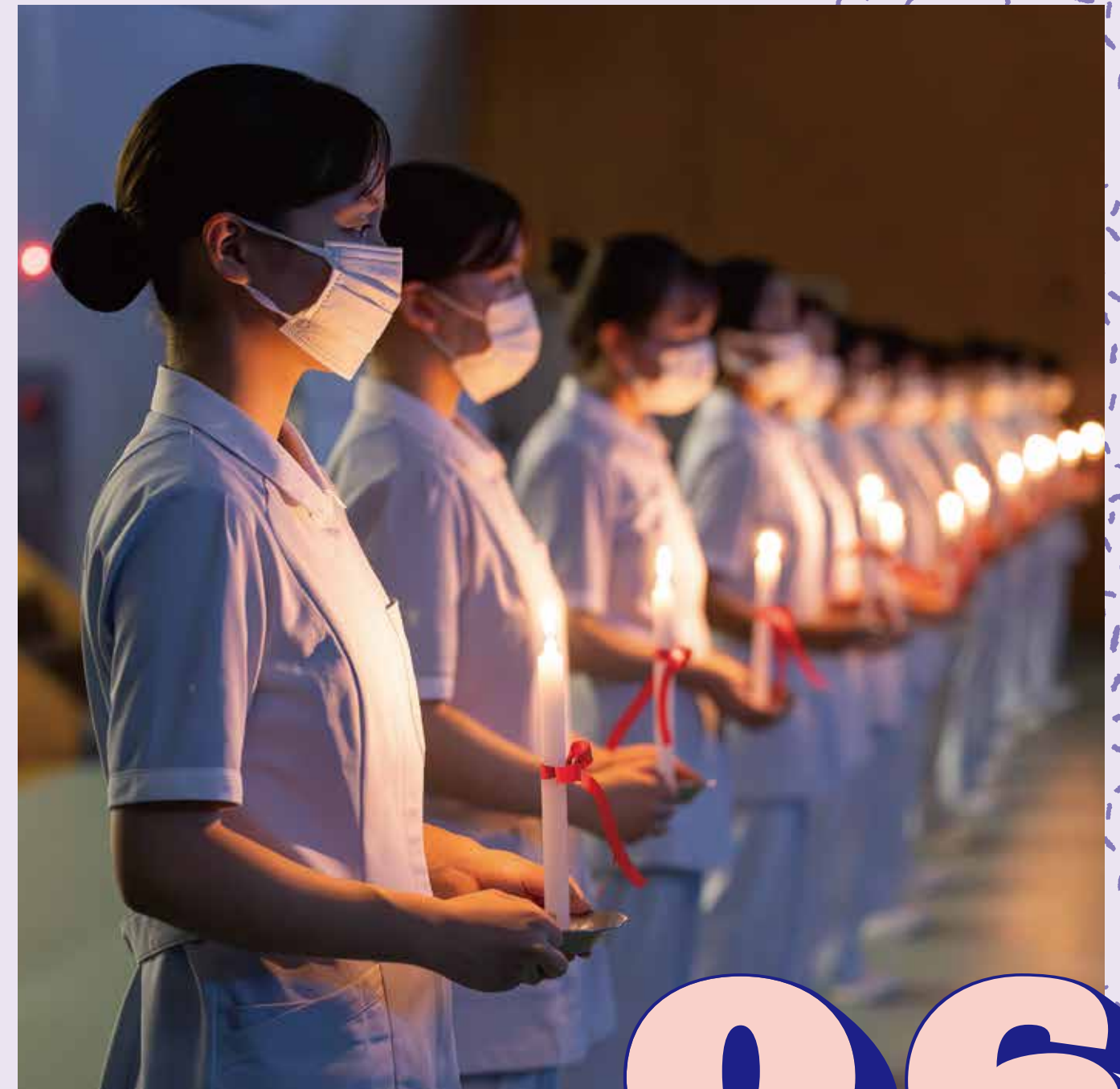
 いわきの

 地域医療

SNS


 いわきの医


Follow Us!!!



特集 『看護師』という生き方

06



『看護師』という生き方

いわき市医療センターは、いわき地域の医療を支える重要な拠点です。患者さんの日々のケアを支える「看護師」は、医療チームの中心的存在です。今回は、看護師歴約40年で、いわき市医療センター 副院長兼看護部長である長谷川吉子さんに、看護の魅力とこれまでのキャリアについて伺いました。

文＝小松理虔 写真＝鈴木宇宙／小松理虔



いわき市医療センター 副院長でもあり看護部長も兼ねる長谷川吉子さん。

体育大学が看護学校か

——まずは、長谷川さんが看護師を目指したきっかけについて教えてくださいませんか？

長谷川：私の生まれは郡山ですが、幼少期にいわきに来て、それ以来ずっといわきで育ちました。とにかく体育が大好きな子供で、高校生の頃には体育の教員になりたいと思っていました。でも、学費や競技成績の面で体育大学への進学は難しい状況になり、他に興味がある職業を考えたとき、たまたま受診した病院でとても印象的な看護師さんに出会いました。その看護師さんは、顔なじみの患者さんにフレンドリーに接しつつ、初診の方には優しく丁寧に対応していて、まるで女優さんのように輝いて見えたんです。それを見て、看護師に興味を持ちました。

担任の先生に相談すると、体育大学の滑り止めとして、いわき市医療センター（当時は共立病院）の看護学校を受けることになりました。学費が比較的安かったことも後押しになりましたね。

結局、体育大学は補欠合格しましたが、両親の説得もあって看護学校に通うことにしました。保健師や養護教諭など、看護以外の道も選べるという考えもありましたが、正直なところ、その時点ではあまり明確な動機はありませんでしたね。

——体育の先生を目指していたのに、看護学校に進むことになって、気持ちに変化はありましたか？

長谷川：看護学校で実習が始まると、すぐに「これは自分に合っているかもしれない」と感じるようになりました。実際、動き回るのが好きだったので、看護師の実習でのアクティブな現場が私にはぴったりでした。保健師の実習にも行きましたが、予防や指導が中心の業務は私には合わないと感じて、気がつけば看護の世界に魅了されていました。その後、看護学校を卒業し、共立病院にそのまま就職しました。



看護師としてだけでなく、学びの多いお話をさせていただきました。

看護師としてのキャリア

——運動好きということが、看護の現場で生きていたんですね。その後のキャリアについて教えてください。

長谷川：最初は脳外科に配属され、13年間働きました。同じ部門にこれだけ長くいるのは珍しいですが、とても良い経験でした。当時は救急集中治療室（E-ICU）がなく、急性期から回復期までの患者さんを一般病棟で診ていました。具合の悪い患者さんは言葉で訴えることが難しかったため、五感をフルに使って患者さんの状態を見極める訓練となりました。この経験が、今でも私の観察力の基盤となっています。

その後は中央集中治療室（CTU）で多種多様な疾患を学び、外来や消化器病棟、地域連携室などを経て、現在は看護部長として働いています。

——とても幅広い経験を積まれてきたんですね。特にご自身が向いていると感じた部門はありますか？

長谷川：地域連携室ですね。地域の病院からの紹介患者さんを担当医に繋ぐ役割をしていましたが、緊急の場合は早急に情報を伝えるため、院内を走り回っていました。また、患者が重なった時、医師と相談した結果、他の病院で対応していただかなくてはならない場合、説明して調整することも重要な仕事でした。このように、地域全体の医療を調整する役割が、自分に合っていると感じました。

看護師のやりがい

——看護師としてのやりがいを感じる瞬間について教えてください。

長谷川：やりがいを強く感じるのは、患者さんやご家族の喜びを直接感じたときです。例えば、集中治療室で意識が戻った患者さんに対して、ご家族が「生きててよかった」と涙を流して感謝してくれた場面は、とても印象に残っています。また、急性期の患者さんが回復し、たくさんの医療機器から解放され、最終的には歩いて退院する姿を見ると、「頑張って看護してよかった」と心から思います。

看護師は、患者さんに寄り添うだけでなく、医師や他の医療スタッフとの橋渡し役としての調整力も求められます。特にチーム医療が重要な現在、看護師が中心となって多職種のケアを調整し、患者さんに最適な医療を提供することが大切です。

——看護師に求められる「調整力」とは具体的にどのようなものでしょうか？

長谷川：医師や他の医療スタッフとの間で情報を共有し、患者さんにとって最適な医療を提供するための環境を作ることです。看護師は患者さんの状態を最も近くで観察しているので、チーム全体の調整役を担うことが多いです。この調整力が、看護師としての大きな役割の一つだと考えています。

これからの看護師の皆さんへ

——いわき市医療センターの看護部長という立場から見て、若手の看護師にはどのような印象がありますか？

長谷川：最近の若手看護師は、先輩とのコミュニケーションが少ないと感じています。そのため、今年初めて1年目と2年目の看護師の交流会を開催しました。同じ職場でも悩みを共有する機会が少ないことが多く、こうした場を通じて、少しでも悩みや葛藤を解消してほしいと思っています。

また、最近は訪問看護や介護施設など、様々な場所で看護師のニーズが高まっています。私としては、医療や社会背景が複雑になっているからこそ、まずは病院で幅広い経験を積み、その後に訪問看護や他の道を選ぶのが良いと思っています。

AIや技術が進歩しても、患者さんの気持ちに寄り添い、気づきを持つことができるのは人間である医療スタッフだけです。この力を養うためには、現場での直接の経験が何よりも重要だと思います。

裏面につづく →



地域の小中学校のみなさんからいただいたという感謝の心。